設備メンテナンスの便利帳（1）『給餌器・給餌ライン』

豚の発育能力を最大限に引き出すためには器具機材のメンテナンスが重要です。トラブルが起きてからでは、対応に余計な時間とコストがかかってしまいます。器具機材を長持ちさせるためにも定期的なメンテナンスが欠かせません。今回からシリーズとして養豚場で使用する木々機材のメンテナンスについてご紹介していきます。その第１回目として今回は給餌器と給餌ラインについて解説いたします。

１．給餌器の点検



		点検頻度
		毎日
	、ガタ	毎日
		毎日
		毎日
	に開くか	毎月
		毎日／空舎時給油
		空舎時
	のスムーズさ	空舎時
給水器（ウェット給餌器）	外して内部清掃	空舎時
給餌器本体	取付部分の緩み、 ホッパや可動部の破損の有無	空舎時
母豚用ホッパー	錆、ホコリ、破損 容量調節機構の動作	毎月／空舎時

給餌器の点検項目と点検頻度の一覧は表１をご覧ください。点検頻度はあくまでも目安です。これくらいの頻度で点検しなくとも問題が起こらないことも多いですし、またこれくらいの頻度で点検すれば大丈夫という保証もありません。仕事のルーティーンとして毎日やった方が効率が良いと思われる項目は毎日点検としています。数か月間隔でも大丈夫と思われる項目を、あえて毎月点検項目としています。その方が点検要領も忘れることが無いですし、担当者が変わった時でも教育しやすいと思います。では、各点検項目ごとに解説していきます。

①食い口の隙間調節（毎日点検）。これは餌が出すぎれば餌の無駄になりますし、腐敗してしまうと豚の食欲も低下してしまいます。逆に絞りすぎると、ホッパには餌があるのに給餌パン（皿）には餌が無くて豚が十分に食べられなくなってしまいます。餌が出る隙間が同じでも餌の形状が異なると餌の出る量が異なります。ですから、餌の種類の切り替え時には要注意です。例えば人口乳前期から人工乳後期への切り替え時や人口乳後期から子豚用への切り替え時です。











写真１，２，３，４，５が良い調節状態です。ドライ給餌器では食い口の底板が1/3くらいの面積が見えているくらいが最適です。ウェット給餌器では餌の出し量だけではなく、ピッカーの位置（高さ）や水道の水圧の影響もあります。水が出すぎていても餌が腐敗しやすくなります。











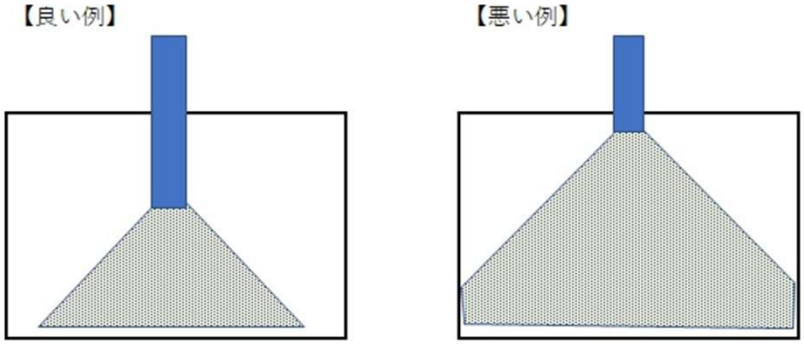


写真６，７，８，９，１０，１１が悪い例です。写真６では両端の食い口には粉っぽい餌が溜まって、カビ臭いにおいになっています。写真７と８は夏場で豚が水を多く出すので、餌が水浸しでカビています。このような場合は、豚房にウェット給餌機以外の給水器を設置し、給餌器の給水配管には個別にストップバルブを取り付けて餌箱への給水量を絞ると良いです。

②餌箱の取付状態や破損（毎日点検）取付のネジや針金等が緩んで給餌器がガタついていると、豚は面白がって動かして遊びます。すると餌箱をひっくり返されたり、ドロップパイプが外れて餌が大量にこぼれる事態に発展します。がたつきを見つけたら速やかに補修しておくべきです。

③ドロップパイプの高さ（毎日点検）餌切れを心配してドロップパイプを目いっぱい上げている農場を見かけますが、そのような農場では写真５のような状態になって両端にカビた餌が溜まっていることが多いです。図12が調節の目安です。

図12：ドロップパオプの高さ（ドライ給餌器）



④母豚用餌ホッパーの開閉ワイヤー又は紐（毎日点検）母豚の給餌をレバーを引くことによって一斉に給餌させている農場が多いと思います。レバーを引いたらすぐに戻していますか？私はすぐに戻さずに、開いた状態で止めて、開き状態を確認してほしいと思います。さっと一回りして全部のホッパーで餌が完全に落ちているかを確認します。もし、餌残りがあったらそのホッパーの開閉用ワイヤー（紐）がずれているか緩んでいますので、調整してください。写真13、14

[13]



[14]



[15]



[16]



⑤出量調節ダイヤル（毎日点検）

写真15と16。ノブを回してちゃんと調整ができるかを確認することを確認。錆びて回りづらかったら給油しましょう。取り付け状態にがたつきがあったり外れていて調整できない状態なら、すぐに修理してください。一般的に調整ダイヤル部分のみを交換できる構造ですので、部品だけ取り寄せて農場スタッフで交換することをお勧めします。

⑥空室時（洗浄後）の点検項目

・ドロップパイプの吊り金具の状態：錆びて壊れそうでしたら新しいものと交換しましょう。

・リミットスイッチ。ホコリが付着していることが多いので清掃します。ホコリが固まってしまうとリミットスイッチが正常にON-OFFしなくなります。

・ウェット給餌器の給水器。外して分解洗浄します。内部にカビや水垢が溜まっていることが多いです。

・給餌器本体の取り付け状態や破損の有無を良く確認しましょう。豚が入っている状態ではじっくり調べられませんから、空舎時に時間をかけて確認しましょう

・母豚用ホッパー。錆や破損の有無、容量調節機構の動作がスムーズに動くか、設定した位置に止まっているか（振動などで勝手にずれたりしないか）の確認

２．給餌器の洗浄

高圧洗浄機で給餌器を洗浄するときの注意ポイントは主に３つ。箱型のタイプの給餌器（写真1～3）の場合、正面から水を掛けると自分（洗浄者）に跳ね返ってきます。ですから、給餌器の横に立って腕を伸ばして洗浄するようにします。意外と当然のことのように思えますが、初心者は教えないと気付かないことがあります。

2つ目は同じく写真1～3のタイプの給餌器の場合、食い口の手前内側（写真17）に洗い残しができやすいです。ここはプラスチック製へら又はブラシで擦って落としてください。パイプフィーダーなど、給餌パン（皿）と床の間に隙間がある給餌器では、この隙間に詰まった糞やこぼし餌や、や、パンの外壁面の汚れを綺麗に落としてください。

[17]



写真１８の例は合格です。写真１９の例では床とパンの間は綺麗になっていますが、パンの外壁面にまだ汚れが付着しています。３つ目は、プラスチックホッパーの内部や蓋、ドロップパイプなどもきれいに洗うことです。

[18]



[19]



写真２０の例は離乳舎全体を綺麗に洗浄されている例です。給餌器はホッパーの中や蓋、ドロップパイプ、配管までできれいになっています。ただ、注意することはシャッター部分の内部に水が入ると内部の餌が固まるので、シャッター部分を洗浄するときは水圧を下げるか、少し距離を開けて短時間に洗い流すようにしましょう

[20]

